

風化する久坂葉子 ～大阪で消えつつある小さい命～

“Yoko Kusaka” Weathering ～“Small Lives” Disappearing in Osaka～

市川 千尋[※]
Chihiro Ichikawa[※]

Abstract

On New Year's Eve 1953, Yoko Kusaka committed suicide by throwing herself at Hankyu Rokko Station and ended her life. It was a time when it was not appropriate for women to live glamorously as women. Sincerely, earnestly thinking about love, but never losing her elegance until the very end, she carried a tremendous burden because she was a versatile person. I would like to think about the way of life of Showa women who have exceptional talent and are fading in their memories through her life and works, which were considered promising for the Akutagawa Prize and died at the age of 21, and through the writings of Masaharu Fuji about her. While the author is engaged in education and research activities based in Kobe, an open lecture on Yoko Kusaka is held every year, and this year marks the third year of the event. This time, titled "Kusaka Yoko Walk", we plan to hold a tour to walk around the old sites related to her. Local high school teachers and international students participate every time and it is very popular.

Keywords : Kobe, Yoko Kusaka

1. はじめに

まず、最初に申し上げたいことがある。私の専門分野は経済学（特に金融分野）についてはかなり独自で研究もしたし、様々な論文も残してきている。ただ、文学については私の専門外であり、日本文学について体系的な勉強をしたり、研究成果を残してきている訳ではない。言うならばかなり不得手な分野である。後述するが、特に関西を中心に行われてきた、いわゆる“VIKING”の文学集団の歴史には、何も言及できる知識も立場もない。さらに神戸という街も、震災前に2回ほど久坂葉子の取材で行ったことはあるが、神戸に転勤となる以前は住んだこともない憧れの街であった。

私が何故彼女のことを覚えているか？

それは私が中学生の時に会った富士正晴氏の「贗・久坂葉子傳」の影響に他ならない（図表1）。この非常に重苦しく、過去と現在の微妙な時間感覚に立ち、一種の執念により書かれた小説は、読めば読むほど新たな発見があり不思議な魅力がある。そのため、私の人生の転機には必ず再読することになっている。ただ、近年調べれば調べるほどこの小説に書かれている久坂葉子と、実際神戸に生きていた久坂葉子のギャップに悩まされることになった。

いまは痕跡が消えようとしている神戸の街に、神戸・昭和の雰囲気と彼女の足跡を辿ることも難し

※日本経済大学経済学部商学科

くなりつつある。その中で、私が公開講座で地元の高校の先生や留学生に彼女の事を語る理由は、いまだに久坂葉子が与えてくれた「原罪」が、自由奔放に人生を謳歌する令和の我々に重大な警鐘を鳴らし続けるという思いからである。いつの日か神戸に「久坂葉子文学館」が生まれることを願いつつ、それまでのいわば「つなぎ」として、この一文では、久坂葉子を知らない人のために、僅かではあるが今に至る彼女の悲しみに下りていきたいと思う。

図表1 贗・久坂葉子傳



(出所) 富士正晴 (1956) 筑摩書房 初版 (筆者所蔵)

2. 先行研究

久坂葉子の研究は、研究者の立場より大きく2つの分類ができると考える。

1) 富士正晴氏の研究

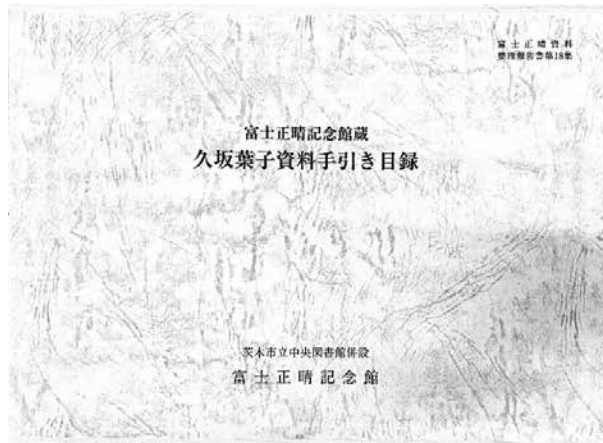
「贗・久坂葉子伝」等富士氏の著作に描かれる久坂葉子に代表される。

著作では富士氏の独特な視点から描かれてはいるが、彼の執念にも似た努力により、散逸されなかった久坂葉子の書簡や小説など残存しており、これらの資料から今後研究が期待できる。富士氏が1987年に死去したため、彼の資料の大半は大阪府茨木市中央図書館に併設されている富士正晴記念館に残されている。富士正晴記念館では2010年2月、「富士正晴記念館蔵 久坂葉子資料手引き目録」という小冊子を発刊しており、富士氏が収集した多くの資料を確認することができる(図表2)。

久坂葉子と知人の書簡でのやり取りを調べる目的で記念館に書簡の閲覧を打診したが、残念なことに書簡の著作権継承者が連絡先を開示していないため、許諾を取り書簡を閲覧することができず研究を進めることができない状況であることがわかった。そして2022年8月現在、この一

文を書くに当たって久坂葉子最後の作品である「幾度目かの最期」の原稿の閲覧を求めたところ、これも承諾が得られないという事で拒否されてしまった。非常に残念である。

図表2 富士正晴記念館蔵 久坂葉子資料手引き目録



(出所) 富士正晴記念館編 (2010) 富士正晴記念館 (筆者所蔵)

2) 久坂葉子研究会

久坂葉子研究会は作家の柏木薫氏が代表をされている昭和50年頃設立された研究会である。これまで「久坂葉子研究Vol. 1～4」など発表。柏木薫氏は久坂葉子と同期であり、これらの資料は体系的な研究成果というより久坂葉子と同時代を生きた方々の貴重な証言と見ることができる。特に2006年、久坂葉子研究会が中心となり出版した「神戸残照 久坂葉子」は、450ページ全て久坂葉子のオマージュ及び久坂葉子の作品で占められており、中でも柏木氏や山内敏子氏(久坂葉子の実姉)の一文は必読に値する内容である。

以上の研究は富士氏の死去、久坂葉子研究会参加者の高齢化などにより、2010年以降は殆ど新しい研究活動がされていないのは大変残念である。

3. 久坂葉子の生い立ち

久坂葉子略歴 (富士、1989: 254)

昭和6年3月27日神戸で生まれる。本名 川崎澄子。

昭和18年4月、神戸山手高女入学。

昭和23年3月、神戸山手高女卒業。

昭和24年(18歳)、島尾敏雄の紹介でVIKING例会に参加。同人となり富士正晴の指導を受ける。

VIKINGに発表した「ドミノのお告げ」が、第23回芥川賞候補となる。

昭和26年(20歳)、VIKINGを脱退、化粧品会社の広告部嘱託、新日本放送嘱託となる。

昭和27年(21歳)、化粧品会社、放送局をやめ、自殺未遂の後、VIKINGに復帰、現代演劇研究所

や同人誌VILLON創刊の活動に参加。

同年（21歳）12月31日、阪急六甲駅で三宮発特急電車に飛び込み自殺

久坂葉子は神戸の名門（川崎財閥）の家に生まれ、幼いころからお嬢様で育てられたが、富士氏は彼女のことを「名門・貴族の家に生まれ育ったくせに、ひどく庶民的なところがある女であり、人の悪口や泣き言をいわず、また、声はアルトで、聞く人をおだやかな気分にする声だった」と書いている（富士、1979：54-60）。だが、彼女はそれだけの女性ではなく、自立心も強く、かといって寛容であり、人に物を頼まれるといやと言えない性格だったようである。

彼女は、山手高女でも成績優秀であったが、次のようなエピソードが知られている。

『勤続十何年ということで教頭職に就いていた音楽の教師が、戦後の民主主義教育における新学科・公民（倫理）を教えることとなった。が、彼女はもともと、この音楽教師が音楽的センスを全く持たず、ピアノをまるでタイプライターを打つようにガンガン鳴らすことを心から軽蔑していたので、この教師の教える倫理など、久坂にとっては滑稽でしかなかった。久坂は音楽的センスに恵まれ、ピアノも堪能だったのである。その音楽教師兼教頭は、倫理の授業で、黒板に善悪や意識や行動だとかいう文字を書き、それを説明するのをいつも馬鹿げたことだとして、久坂はノートをとらずにぼんやりしていたのだが、ある日、これから二十分で自分の行為を善悪の理性で反省し、悪だと思った点を紙に書いて提出せよ、それを試験のかわりにするといい、答案用紙を配りはじめたのだった。それに対して、「何のためにそんなことをするのか」と彼女は抗議し、自己反省は大切だと主張する教師に、反省は自分だけでやるもので、それを試験がわりにするとはもってのほかだときめつけると、相手は怒りののしつたのだ。

「悪趣味ですね、人の悪なる行為をききたいとは……」

と涙声で久坂はいい、もし自分が淫売行為をしていたとすると、あなたは答案用紙に可か不可をつけるだろうが、わたしの心理も行為の動機も知らないあなたが、ただ、不可とつけるのは実に無責任だとうたえと、彼は非常な怒りでチョークを投げつけ、このことは一時おあずけだというような曖昧な言葉をのこして出て行ったのである。この事件はすぐに学校中にひろがり、久坂葉子は不良少女だということになって、生徒たちの彼女を見る目はすっかり変わってしまう。久坂は学校を休み続け、山手高女を中途退学し、相愛女専に移るが、そこでも中退したのだった……』（大川、1999：159-160）

しかし、久坂は名門の出身で、山手高女に川崎家が多く寄付をしていたため、卒業証書が自宅に送られてきたのである。この卒業証書を見た時の彼女の複雑な心境は察するに余りある。家庭の事情で退学した生徒には何も送られないのに、何と言う不公平なことだと考えたのである。

4. 富士正晴と久坂葉子

当時、関西の文壇は戦争から復員してきた作家、富士正晴の主催するVIKINGという文芸集団が関西で活動していた（図表3）。

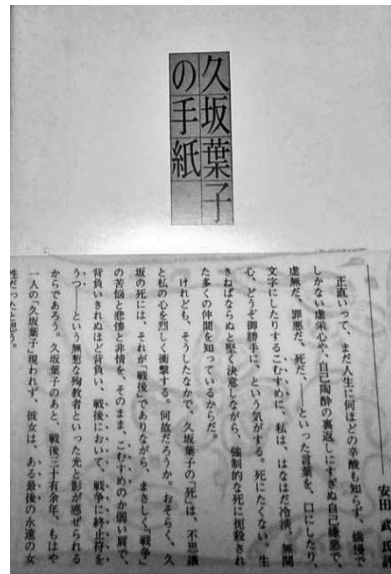
図表3 VIKING 43



(出所) 小島輝正編 (1952) VIKING CLUB (筆者所蔵)

豪放磊落な感のある富士氏を中心に、島尾敏雄なども参画していたこの集団に、神戸から久坂葉子も参加したのである。前述の学校関係のいざこざなどで自殺未遂を起こしていた久坂にとって、粗野ではあるが慈父のごとき富士氏は、彼女の唯一の理解者として信頼するに値する人格であった。富士氏も久坂葉子の文才を見出ししていた。実際に久坂は芥川賞の候補となったが、作品のみならず人生観や人格までも切磋琢磨するVIKINGの独特な雰囲気にも馴染むことが難しく、脱退を余儀なくされるのである。久坂はVIKING脱退後、ラジオ局などに勤めるが、勤務先で妻ある上司と恋に落ち（今で言う不倫か！）、彼の子供が欲しいとまで思うようになったが、相手は遊びのつもりであつた。久坂は3回目の自殺未遂を起こし、後遺症で結核を病むに至る。これを見ていた富士氏は、久坂を勇気づけようと、久坂と“贗の恋文”を交わすのであった。元来、ユーモア感覚もあった富士氏は、久坂にユニークな恋文を送り続け、久坂もだんだん明るくなり、富士氏や周囲に対して心を開くようになっていった。この往復書簡が「久坂葉子の手紙」の中心を形成している（図表4）。インターネットやSNSもないこの時代に、富士氏や久坂にとっても、“手紙”とは生きていくことそのものであった。資料として残されている久坂の手紙は、筆書きの実に立派な書簡であり、その中にも若い女性の生き生きとした感性を感じ取れる。自分の似顔絵あり、漫画あり、詩がある。久坂の希望や夢を包み込む書簡は、久坂の重要な表現手段であったと言うことができよう。

図表4 久坂葉子の手紙



(出所) 富士正晴編 (1979) 六興出版 初版 (筆者所蔵)

富士氏の最大の功績の一つに、久坂葉子の書簡や作品を散逸させなかった点がある。それどころか、久坂の書簡を保管している家族や、久坂を過去の人として焚書しようとしていた久坂のかつての恋人(後述 北村氏:鉄路のほとり)とも積極的に会い、回収していった。富士氏ががいなければ、本当に“小さい命はだれの頭にも残らない”(久坂葉子の遺書からの一文)状態になるところであった。今日久坂葉子の研究が出来るのも、富士氏の陰の努力『書簡争奪戦』が成功したことによるところが大きいのである。

5. うどんとれもん

『うどんのどんぶりが運ばれて来た。汚いが、がらんと小広い飯屋だった。めし、しる、うどん、そば、きつねうどん、たぬき、あんかけ、縦長の紙に書いて壁にはりつけてあるその値段書き。久坂葉子が手をのばすと、尻目にかけず、猫は足を早めて、調理場へ逃げこんで行った。ラジオが雑音をたてる。薬味入れをあけると、彼女は葱をどっさりうどんの上に入れ、それから、唐辛子を真赤になるほどふりかけた。

葱の緑と唐辛子の赤がうどんの白さの上で、太てぶてしい程美しかった。ラジオは下手な漫才をやっているらしかった。ひりひりとする唐辛子の味も好きだが、その鮮やかな色も好きだ
～中略～

こうして、素うどんに、たっぷり葱と唐辛子をかけて二杯食べたんだった。お連れは誰だつたか、その時、何を話していたか、それは忘れてる。覚えているのは、葱の緑、唐辛子の赤。南国的な激し

いコントラスト。そうだ、その時も、わたしは琉球へ行きたいと思ったんだ。』（富士、1980：98-99）

琉球…沖なわの歌をよく歌ってくれた「緑の島」は、久坂葉子の初めての男性（不倫相手の上司）だった。戦後、“斜陽”と呼ばれた名家での閉塞感、自分自身の悩み、すべてを受け止めたのは、妻子あるプレイボーイであった。久坂葉子は「幾度目かの最期」の中で、彼を「緑の島」と呼んでいる。恋人（北村氏：鉄路のほとり）ができてからも、久坂は最後までこの男への未練を断ち切ることができない。

れもん…それは彼女がいちばん大切にしていた女性のプライドや、品格、そして愛の姿かもしれない。自殺未遂の際、れもんを持ってきて病室を訪れた北村青年（鉄路のほとり）は、彼女の支えであり、かつ、苦しみの根源でもあった。この北村青年と、OL時代に不倫関係にあった男（緑の島）、富士氏の知り合いの男S氏（蒼白き大佐）この3人の中で彼女の「原罪意識」（罪ある女）が形作られていった。また、彼女は神戸のいわゆる“お嬢様”であったが、戦後、傾いていく「家」の中で、気丈にもそれを支えていかねばならなかったのである---若干21歳で。

れもん れもん
れもんのにおいは
静止した影のように
けだかいから
過去に罪を背負わされた
女の嘆きを知っている。 れもん
佐藤和夫編（2003：第3巻209）

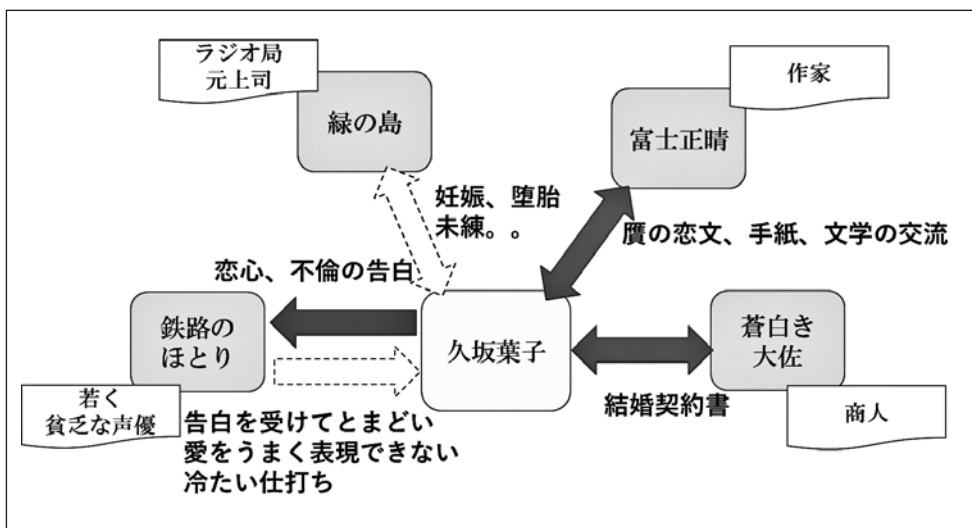
わがこひびとよ われしなば
しろききぬにて まきたまへ
わがむなもとの きぬの上（へ）に
あかきはなおば のせたまへ
こひのしるしの あかきはな
つみなるこひの しるしにと

わがこひびとよ われしなば
あかきはなのみ あいせかし わがこひびとよ
佐藤和夫編（2003：第3巻208）

6. 久坂葉子トポロジー

久坂葉子を取り巻く複雑な人間関係を図に表すと、図表5のようなになる。ちなみに、「緑の島」、「鉄路のほとり」、「蒼白き大佐」とは、久坂葉子の著作「幾度目かの最期」の中で使用されている呼称である。まず、久坂葉子の恋人であった「鉄路のほとり」（北村氏）は久坂が最も愛した男性であり、赤い矢印となっている。久坂の思いに対して、北村も久坂を愛しているものの、かつての「緑の島」との思いを断ち切れない久坂の心境も察しており、それが冷たい仕打ちとなることもあった。また、久坂葉子の自殺未遂について知っており、彼女を妹のように慕っていたビジネスマン「蒼白き大佐」（彼は気落ちしている久坂葉子に、誰も嫁の貰い手がなければ自分が結婚してあげると言い、嘘の結婚契約書を交わすのである）。さらに文学関連で富士氏を加えることにより、交友関係は久坂葉子を振り回す（振り回された？）側と、彼女のセイフティネットである富士氏と「蒼白き大佐」の微妙なバランス関係により成立していたことを知ることができる。

図表5 久坂葉子トポロジー



(出所) 筆者作成

7. 未解決の課題

久坂葉子の調査に関しては、現状多くの未解決課題が残されている。

1) 久坂葉子最期の日の行動と「幾度目かの最期」の原稿

史実では、昭和27年12月31日、阪急六甲駅で久坂葉子が自殺するが（図表6）、彼女が全力で書き上げた「幾度目かの最期」原稿は完成後、京都に赴き北村へ直接手渡し彼に最後の別れを告げたと言われている。そして12月31日、神戸元町での忘年会に参加後、自殺に至るまでの彼女の行動が完全に分かっていない。

図表6 阪急六甲駅のホーム



(出所) 筆者撮影

自殺後、「幾度目かの最期」原稿は富士氏が北村の居宅へ行き回収の後、富士氏ではない誰かが久坂家の許諾を得ずにVIKINGと新潮に発表した。富士氏はこう書いている『久坂葉子の絶筆である「幾度目かの最期」は久坂の家の承認もなく「新潮」に発表された。この絶筆の発表は久坂の家を激怒させ、その原稿料は叩きかえされたと記憶する。』（富士、1981：565）しかし、富士氏が編集を手掛けその後発刊された「私はこんな女である 久坂葉子遺作集」（図表7）では、「家」の記述に関する一部を、富士氏が久坂家に配慮して削除した。富士氏は所有している久坂葉子の原稿をもとに彼女の全集を世に出したかったが、自分では難しいため、当初構想社の坂本氏に依頼する。しかし坂本氏も遅々としてその作業（久坂家との交渉）を進めることができない。そこで一部その作業を坂本氏に代わり六興出版の馬場氏が久坂家との交渉を進め、昭和53年に「久坂葉子作品集女」、昭和54年に「久坂葉子詩集」同じく昭和54年に「久坂葉子の手紙」の三部作を発表するに至るのである（富士、1981：568-569）。このように、富士氏が述べていない部分で、久坂葉子の作品発表を巡り富士氏が久坂家とどのようなやり取りを行っていたのか、富士氏逝去の今となっては詳細が謎に包まれている。

図表7 私はこんな女である 久坂葉子遺作集



(出所) 久坂葉子 (1955) 和光社 初版 (筆者所蔵)

2) 未発表の長編小説と作品、非公開書簡など

未だに久坂葉子の未発表作品や書簡などは公開に至っていない。恐らくは多くが久坂家に存在し、一部が富士正晴記念館、残りは友人等が所蔵しているものと思われる。前述した「富士正晴記念館蔵 久坂葉子資料手引き目録」(図表2)には、富士氏が所有していた久坂葉子の原稿101点が名称のみ記載されている。昭和53年の「久坂葉子作品集女」(六興出版)および昭和64年「新編 久坂葉子作品集」(構想社)に掲載できなかった作品の一部が、久坂葉子研究会の尽力によりその後「久坂葉子研究Vol. 1～4」(久坂葉子研究会)および「久坂葉子全集」(鼎出版)に掲載されているが、それは久坂葉子の作品の全てではない。出版を目的として久坂家や富士正晴記念館と交渉できる出版社等は別にして、地域に住む若い読者や研究者が、容易に久坂葉子の資料に接し、共感し新たな後継者を増やすことができない状況となっている。これは元来、久坂家(または神戸)が所有、保存、公開しなければならない資料を富士氏が預かったまま逝去し、その原稿を大阪の富士正晴記念館が管理しているためこのような状況が生じたものと思われる。

なお、この一文の題名になっている「小さい命」とは、久坂葉子の「原稿の中に残っていた二枚の文章」の中で使用した自らのことであり(富士正晴記念館、2010:8)、「大阪で消えつつある」といのは、茨木市に残され、中途半端なこれら久坂の原稿や書簡について比喩してものである。

自由な資料の開示と閲覧。そして神戸に久坂葉子文学館ができるのを心より願っている。

8. 神戸という地域と久坂葉子

2010年以降、神戸においては久坂葉子関連のあらたな研究プロジェクトが立ち上がったり、関連する著作が発刊されたことは私の知る限りなく大変残念な思いがある。なぜこのような風化が起こるのか考えると、いくつかの理由が考えられる。まず、久坂葉子を知る人が少なくなっている事実がある。私たちの世代（60歳以上）に久坂葉子を知るきっかけを作った昭和50年代の久坂葉子3部作（六興出版の作品集、詩集、手紙）は、富士氏参画のプロジェクトであり、意地悪な言い方をすると学生運動で喪失感が広がっていた当時の若者の心を捉えた「夭折者ブーム」のタイミングを計り成功したとも考えられる。そのブームの中では「20歳の原点」の高野悦子や、「悪魔と美少年」の松永伍一等の著作があり、多くの若者の心を捉えていた。実際、これらの著作はラジオの深夜放送でCMを流すほど影響を与えており、これがきっかけで新たに多くの久坂葉子ファンが生まれることとなった。そして、昭和55年5月茂木草介脚本による「落ちていく世界」（久坂葉子原作）がラジオドラマとしてNHKFMで放送されたり（図表8）、女性週刊誌に特集が組まれるなどブームはピークに達した。

図表8 「落ちていく世界」ラジオ劇場 録音



(出所) NHK (1980) 放送録音 (著者所蔵)

その後、時代はバブルの崩壊や神戸震災等さまざまな困難な状況が続き、若者は文学よりも現実に目を向けるようになっていった。風化が起こる2つ目の理由は、伝承者の減少である。柏木薫氏は2022年現在92歳でご存命だが、伝承者、研究者の減少は否めなく、昭和50年頃柏木氏が主宰した久坂葉子研究会のメンバー高齢化が避けられない事実としてある。3つ目の大きな原因として、これは久坂葉子を取り巻き悩ませていた問題とも通じる事だが、「家」の問題が関連する。財閥の末裔（斜陽）と言われた久坂葉子だが、前述した公開されない久坂葉子の作品、随筆、散文、詩、書簡など著作権等の関係もあり調査することすらできなくなっている。もちろんそれらには富士氏の収集した貴重な資料等も含まれる。願わくば地元の地方公共団体等が中心となり、これらを体系的に調査、収集することができれば、より詳しい久坂葉子の実像に迫れるだろう。

このような状況の中、筆者も2019年4月神戸三宮キャンパス着任後、微々たる活動を開始した。2019年に小職が在籍する日本経済大学神戸三宮キャンパスで久坂葉子に関する公開講座を実施することとし、地域の住民や当大学の学生等を対象とする活動に切り替え、以降昨年まで計3回の公開講座

を実施している（図表8）。公開講座では、久坂葉子の「古蘭よ」の楽譜をDTMを用いて再生したり、神戸散策と称し神戸三宮キャンパスから新神戸駅、そして久坂葉子の菩提寺である徳光院を経由して彼女の実家があった神戸北野ホテル近辺やトアロードに至るルート全員で散策を行った。また、それらをYouTubeを通じて配信をする試みを始めている。まだ構想の段階ではあるが、本年は「久坂葉子最期の日」というテーマで、久坂葉子が自殺する直前に訪れた元町商店街の喫茶店やカフェの名残を辿ろうと考えている。公開講座の参加者は地元にある私立高校の教員や当大学の留学生など、人数は必ずしも多くないが、毎回必ず参加して頂く人もおり多くの手応えを感じている。

図表9 神戸散策～久坂葉子さんを偲んで～ ポスター

The poster is for a seminar titled "日本経済大学 地域貢献セミナー 神戸散策 ～久坂葉子さんを偲んで～" (Japan Economic University Regional Contribution Seminar Kobe Scavenger Hunt ~ Remembering Ms. Kusakabe Eiko ~). It is scheduled for November 13, 2021, at 13:00. The venue is Japan Economic University, Kobe Sannomiya Campus. The seminar is divided into two parts: Part 1, "久坂葉子さんについてミニ講義" (Mini-lecture about Ms. Kusakabe Eiko) from 13:00 to 14:00, and Part 2, "神戸散策" (Kobe Scavenger Hunt) from 14:00 to 16:00. A photograph of Ms. Kusakabe Eiko is shown in the top right. The bottom right features a map of the route from Japan Economic University to Shin-Kobe Station, then to Tokukouin, Kitano Yariya, Toa Road, and finally to the former Mitsukoshi building. Contact information for the Shikawa Research Room is provided at the bottom left.

日本経済大学 地域貢献セミナー
神戸散策
～久坂葉子さんを偲んで～

2021年11月13日
13:00～
集合：日本経済大学
神戸三宮キャンパス

第1部 久坂葉子さんについてミニ講義
13:00～14:00

久坂葉子さんについてのミニ講義を聞いた後彼女の史跡を巡り神戸を散策します

第2部 神戸散策
14:00～16:00

久坂葉子を読む
～21歳で六甲駅に消えた才媛の軌跡～

日本経大⇒新神戸駅
⇒徳光院⇒北野異人館
トア・ロード
⇒喫茶店ムジカ跡

おもい おもい
おもいのにおいで
静かな影のように
すばいから
色々に羅を背負わされた
女の嘆きを知っている。

日本経済大学 神戸三宮キャンパス 市川研究室
651-0094
神戸市中央区琴ノ緒町4-4-7
TEL 078-265-6111 担当：市川

（出所）市川研究室（2021）日本経済大学 神戸三宮キャンパス

9. おわりに

当初神戸新聞のセミナーや神戸市の市民講座等に対して久坂葉子関連の講座を提案し、セミナーを中心とした活動展開を模索した。各所で提案は聞き入れてもらえたが、実現には様々なハードルがあるようで、セミナー実施には至らなかった。昭和50年代のブームを経験した神戸にとって、久坂葉子のご遺族にとってもこのブームはネガティブなものであり、もうそっとしておいてほしいとも近い思いがあるような気がしてならない。

この一文は2022年8月25日、夏の暑さが息を吹き返した一日。大倉山にある神戸中央図書館の第3

閲覧室の机から執筆している。東京出身の私がこの場所で久坂葉子関連の一文を執筆できる喜びを抑えることができなかった。この場をお借りして取材に協力頂いた茨木市にある富士正晴記念館の司書の方、神戸中央図書館の司書の方にお礼を申し上げたい。

注

- 1) なお後日識者より、近年下記論文が発表されているとご指摘を受けたので、コメントしておく。

岩田ななつ 「久坂葉子と井上靖：『井上靖宛未発表はがき』（県立神奈川近代文学館所蔵）翻刻と考察」（鶴見大学日本文学会（48）2014-03 p.59-68）

岩田氏の論文によると、ふと立ち寄った神奈川近代文学館で「所蔵作品を検索するパソコンに『久坂葉子』と入力してみたら思いがけず出てきた」（p.59）とし、岩田氏が概館に閲覧請求し、一葉の書簡が公開され本論文作成に至ったと記述されている。書簡のような私書を閲覧、論評するにあたり、本人あるいは家族の許諾は必須となるのは言を待たない。「著作権時効」考え方もあるが、著作継承者がいる限り、その著作権を継承した人物に論文掲載の許諾を得るのは当然である。現に大阪府の富士正晴記念館では、久坂氏の書簡を数多く所蔵しているが、著作権の関係で公開されていない。筆者が富士正晴記念館を現地調査し、書簡の閲覧希望を提出した際にも、司書からそのような説明を受けている。そして、久坂葉子の著作権継承者においては、「久坂葉子さんの著作権の継承者が連絡先等を公開されていない」（富士正晴記念館 資料係 船ヶ山様）ということが分かっている。

そこで今回、2022年10月1日に神奈川県近代文学館に現地調査し、岩田氏への開示状況について調査したところ、岩田氏は閲覧の特例である「公開承諾書提出免除願」を提出したことが判明した（神奈川近代文学館 資料係 藤木様）。この制度は、著作権者またはその関係者の連絡先を利用者が可能な限り調査することを条件に閲覧させる制度であり、利用者は著作権の継承者の承諾書を後送する必要があるが、現状それは提出されていない事が分かった。さらにこのような経緯は論文の「おわりに」「参考文献」にも全く記載されていない。

岩田氏を責める訳ではないが、久坂葉子の著作を巡る煩雑さは、研究者をも混乱させる状況であることは間違いなく、最後に一例として記しておく。

文献一覧

- 大川公一(1999)『竹林の隠者』、影書房
佐藤和夫編(2003)『久坂葉子全集』、鼎書房
富士正晴(1979)『極楽人ノート』、六興出版
富士正晴(1980)『贗・久坂葉子伝』、講談社
富士正晴(1981)『贗・久坂葉子伝』、六興出版
富士正晴編(1989)『新編 久坂葉子作品集』、構想社
富士正晴記念館(2010)『久坂葉子資料手引き目録』、富士正晴記念館

